

る。当時の精神科医局長であった宮里好一先生が（北部地区の要請もあり）平成2年に急に開業されたのだが、その当初から定期的にお手伝いする機会を得た。大学院へ進学、（なんとか）修了したあと、その法人へ就職させていただいた。間に4年の空白期間を置くものの、今に至るまでお世話になっている。ありがたいことである。

宮里先生は神経内科や器質性精神障がいへの造詣も深く、それに倣い、私も認知症の診療に興味を抱き、勉強させていただいた。気がつけば、老年精神医学、認知症の診療にどっぷりと浸かっていた。ささやかではあるが、介護保険制度が始まった当初から認定審査会や介護老人保健施設での診療など、病院という枠の外での活動もさせていただいている。今では私の大好きな活動だ。

そのような機会を通して、病院の中だけでは決して出会うことのなかった、たくさんの人に巡り会えた。他の医療機関のみなさん、介護保険施設や地域で頑張っているみなさん、行政や保健所、そして地域の集まりなどで直接お会いさせていただいたみなさん。こんなに素敵な出会いが、私の大きな力になり、今の診療を支えてくださっている。本当にありがたいことである。かけがえのない宝物だ。

こんなに好きなことをさせてもらっているのも、素晴らしい方々に巡り会えたのも、医師であってこそなのである。ああ、医師になってよかった。

「旅の途中」

旭町医院 院長

堀 元 進

日本語に、小医、中医、大医という言い回しがある。医師の在り方に関する言葉である。

小医は病を、中医は人を、大医は社会を治す。「医」の本質を良く言い当てている。つまり世には多くの職種、専門が存在するが、医師はその仕事の本質において特別な職業。多角的、複層的であらねばならないという意味であろう。

人が病を得た時、患者個人の体調不良や苦しみはその個に留まらず、家族、社会へと負の影響が波及して行く。人が健やかに、穏やかに暮らす日々をさりげなく支える事がまず「医」の基本である。我々の仕事は生命体が持つ「自然治癒力」に負っている。当たり前だが、最も平易な意味での「助ける」はその治癒力を引き出す意であろう。今、その基本の上に様々な形で、より高次の医療の世界が展開されている。科学技術や工業技術、人類

が獲得して来た数多くの進歩が、医師のスキルと相俟って多くの人を病から救っている。

私の診療所には、とても自分の知識や経験では手に負えないと思える患者が自分を頼って来る。在宅で診ている末期癌の患者やALS等の難病患者がそれにあたる。もちろん在宅の現場でも麻薬の投与方法の進歩を始め、様々な技術的革新が緩和医療や難病ケアの質を高めている。然し、患者さん達の多くが真に欲している事は他にある。

人間にとっての病は、機械における部分的故障とは異なる本質を持つ。人は「心身」より成る。病気になり、治療に専心する。気力を維持し、何とか自分の未来を切り開こうとする。然しながらその願いが叶わぬ事もある。運命は時に十分、非情である。癌末期や難病の患者さんの心には常に絶望と不安が錯綜し、否認と合理化、受容の肯定と否定、焦燥が横たわっている。我々はその患者さん達を「救う」「助ける」事は出来ない。

その時に何が出来るのか。望まれている医療者としての姿勢とは何か。私は沖縄から学んだ人間の有様（ありよう）に思いを馳せる。

人間として相手の悩みに寄り添い、可能な事を一緒に探し、明日をも知れぬ運命を一時的にせよ心理的に共有する。「共に歩む」姿勢に尽きると思う。それは医師という全人的職業が持ち得る究極の信頼関係であろう。

その本質は人間として「共に在る」事の大切さ。「共感の力」である。

人間はどの様な逆境に有っても希望を欲する。限られた時間の中で自分の運命を肯定しなければならぬ作業はひどく辛い。暗く、長いトンネルに似る。出口は見えない。

その孤独の深刻さ故に、真に人間の本質を知る医師が側に立ち、対等の想いでその辛さを共有する必要がある。今、自分が行っている医療の原点は沖縄にある。沖縄社会が持つ他人と自分の距離の近さ。分かち合って共に暮らす生活術。肝心(チムグクル)。人間という生き物の質の高さ、懐の深さを私は沖縄から学んだ。

未だ旅の途中。今はまだ北の地であって、南から吹く風に助けられ、今暫くは「医」の道を探す旅中の日々である。